本興寺だより

令和三年
八月
第二二四号

「悪の中の大悪は我が身にその苦を受けるのみならず、子と孫と末へ七代までも続くなり。善の中の大善もまたまたかくのごとし」

（宗祖　盂蘭盆御書）

コロナウイルス感染の拡大で緊急事態宣言が発令されている中で、東京オリンピックが一年遅れて始まりました。開催に賛否両論あり、競技会場もほとんど無観客で、盛り上がりに欠けるスタートでしたが、テレビの放映で海外から多数の選手等が訪れていること、裏方で沢山の人に支えられていることを見ると、何とかコロナに負けず成功裏に終えて欲しいものだと思います。

帰省もままならない中で八月の盂蘭盆を迎えます。お盆は先祖の御霊をお迎えし感謝と供養の気持ちを新たにする時です。

私達はご先祖というと、記憶にある人は父母や祖父母までが多いと思われます。それ以前の先祖は、どういう人であったか、どういう生き方をされたかは分かりません。どういう思いを子孫に託されていたかも知りません。しかし私達は、過去遠くから連なる先祖の一人でも欠けていれば、今この世に生まれていません。過去に生きた多くの先祖の命と願いを受け継いで今生きているのは厳然たる事実なのです。

人は、先祖から子孫へという過去から未来への縦軸にあたる永い時間の中で命を与えられて生きており、また日々の生活は、横軸にあたる多くの人々の繋がりと助け合いの中で生きています。孤立して生まれた命ではなく、単独で誰の世話にもならず生きている命でもありません。この当たり前の真実を、人は心の底では忘れていると仏様は云われます。

左右の等しい翼で飛行機が空に舞い上がれるように、ご神仏・ご先祖と、生きて関わり合う人々への感謝の両翼を広げて、人は己の人生を本当に羽ばたかせることが出来るということです。

お中元とお盆の時期は重なりますが、お中元は存命のお世話になった方々に贈りますが、亡きご先祖や恩を受けた人との共食（共に食事をする）をも意味し、白米・麺・果物・菓子などを送って謝意を表すことでもあります。そこには、生者と死者との垣根も無く、自分と他人との区別も除き、共に生き共に支え合って生きているという想いがありました。

お盆の由来は、お釈迦様のお弟子の神通力に優れた非常に親思いの目連尊者が、母が死後の世界でどのように過ごしているかを神通力をもって見ると、餓鬼の世界で飢えと渇きに苦しむ母を発見し、どうしたら母を救えるか？とお釈迦様に母を救う道を問いました。すると「来る七月十五日は沢山の僧侶が長い修行を終える日であるから、その日に僧侶方に、母のみならず同じ餓鬼界に落ちている沢山の人の為に供養しなさい。そうすればその功徳によって母の罪も消え、餓鬼道の苦しみから逃れることができる」と教えられ、その通り実行して目連尊者が母の苦しみを救われたことから始まりました。

七月十五日（新盆）八月十五日（旧盆）は先祖への追善の日、お盆として受け継がれています。

法華経には、「仏の言葉は真実であり偽りはない」とはっきりと示されています。私達は、自分の価値観や信念で受け入れられる部分しかなかなか信じられません。信じられない部分は、空想や単なる例え話として片付けてしまいます。

しかし精神世界は死後も確実に存在するのです。しかも魂の世界では、生前の本人の善悪の行い、子孫の供養の功徳が大きく影響を与えるということです。

生きている私達が、地獄、餓鬼、畜生の悪道の心になり怒りや苦しみを感じることもあれば、平穏な人の心や貴い安らかな心になることがあるように、死者も同じような心を感じるということです。

生前の本人の心持ちが死しても続くのです。死後の魂に本人の生前の心持ちを見つめさせ、安らぎを与えられるのは供養の力なのだということです。

人は餓鬼の世界に生前も死後も陥りやすいのです。「鬼」とは「遠仁」（おに）でもあります。「仁」とは、人として正しい生き方を示す「徳」の基本であり、自分同様に他人を思いやる深い人間愛の心です。その心から最も離れて遠い、自己勝手な心が鬼（遠仁）の心なのです。

お盆の前後には各お寺で「施餓鬼供養」があります。あらゆる万霊、有縁無縁の一切の精霊、各家のご先祖に飲食を供え供養して冥福を祈ります。生者も死者も、有縁無縁を問わずあらゆる命はつながりを持っているからです。それと同時に自分の心の中にもある餓鬼＝遠仁の心に気付き、その生滅を願うものです。

自分の心にあったものだけをむさぼり求めるのは生きながらの餓鬼道だと説かれています。

命ある全てのものに善行を重ねることが、他を救うとともに自分を助ける道なのです。

お盆には、自分に受け継がれてきたご先祖からの尊い命をしっかり見つめ、御霊への供養の姿を家族にしっかりと引き継いでほしいものです。

本興寺住職　中　谷　聰　秀　合掌